

# いつまでこんな不安定な状態が続くのか！？

## タイラギ昨季の6割減

【西日本新聞2011年4月29日】

タイラギ昨季の4割で今季終了、43トン。太良町大浦の漁業者らによる今季の有明海のタイラギ漁は28日終わった。県有明漁協大浦支所によると、県内の水揚量は貝柱の重さで43・1トン。豊漁だった昨季の112・6トンに比べ、約4割にとどまった。支所の赤木勝蔵運営委員長は「海の状況は改善しておらず、来季がどうなるかは分からない。海の再生なくして地域の活性化はない」と訴えた。支所によると今季は昨年12月1日の解禁で操業は88日間。水揚げは07年度が2キロ、08年度は940キロと低迷したが、昨季は13年ぶりの豊漁となった。漁期後も成貝が多く残っていたので、今季も漁業者の期待は高まっていた。しかし猛暑などの影響で



貧酸素水塊が昨年夏に発生。これが原因とみられるタイラギの大量死が確認され、今季は福岡県大牟田

市沖での操業となった。貝の数も少なく、貝柱の大きさも小さかったという。

太良町大浦の漁業大鋸武吉さんによると、水揚量が少なく、人件費や燃料代など採算を考慮し、3月末で打ち切る業者もいたという。大鋸さんは不良の原因として、国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門の閉めきりによる影響を指摘した上で、「稚貝はいるけど、予想はつかない」と来季の漁を心配していた。

【西日本新聞2011年5月1日】  
一転不漁、落胆の漁業者。有明海タイラギ漁。高級二枚貝タイラギの県内水揚量の大半を占める有明海漁協大浦支所が今季の漁を終えた。収穫量は43・1トンで13年ぶりの豊漁を記録した昨季から大幅減となり、関係者の間には落胆の声があがった。

「今季の大牟田市沖は、数も少ない上に、貝柱も小ぶり。昨年は毎日45キロほど捕れていたが、今季は平均で17キロほど。せつかく太良町沖が復活したと思っていたのに…」と太良町の漁業者は言葉少なに語った。

同町の漁業者は3月下旬、今季の漁に見切りをつけ、白石町でタマネギの収穫を手伝い生活費を稼いでいる。「タイラギが生きていけば、



貝柱が大きく育ち、高値になったのに。いつまでこんな不安定な状態が続くのか。生活できない。」と嘆く。

同支所によると、68隻が操業許可を受け、最も多かった日は52隻が出漁したが、4月中旬にはほとんど船が姿を消した。有明海のタイラギ漁の低迷が始まったのは、諫早湾干拓事業の潮受け堤防が閉め切られた1997年以降。漁業者たちは早期の開門調査開始を求めている。

## 来季も不漁が決定的か…

【読売新聞2011年7月20日】

有明海でタイラギ多数死ぬ。福岡県大牟田市沖の有明海で先月から今月にかけて、タイラギが多数死んでいるのが、佐賀県有明水産振興

センターの調査で分かった。センターは「原因は不明。今後の状況を注視していく」としている。センターによると、太良町沖や大牟田市沖など計5地点で6月23日にタイラギの生息調査を実施。潜水士が採取した昨夏生まれのタイラギを調べたところ、同市沖の2地点で5割ほどが死んでいた。今月8、14日の両日に同じ5地点で調査した際も、同様の傾向を示したという。

昨年夏は、太良町や鹿島市の沖合で大量死が確認され、昨季のタイラギ漁は大牟田市沖での操業となった。同町の有明海漁協大浦支所の赤木運営委員長は「毎年のようにタイラギが夏場に死んでいるので、今回も気がかりだ」と心配している。

【西日本新聞2011年7月21日】  
大牟田沖のタイラギ大量死。福岡県大牟田市沖の有明海で、高級二枚貝タイラギが大量死していることが佐賀県有明水産振興センターの調査で分かった。大量死が確認された地点は、稚貝の生息数が多い場所のため、同センターは「調査で集めた半数の稚貝が死んでおり、このまま広がれば漁が厳しくなる」とみて、監視体制を強化する。有明海のタイラギは、諫早湾干拓事業で潮受け堤防が閉め切られた97年以降、生息数が激減し、不漁の年が多くなっている。